

会津戦争のあとで——陸奥国斗南藩を中心として——（要旨）

岡本 盛子

徳川幕府が弱体化し、京都を中心に尊王攘夷・倒幕運動が盛んになった幕末、京都守護職に任命された会津藩主松平容保は、藩祖・保科正之が制定した「わが子孫たる者は徳川宗家に対し一途に忠勤をあげめ」という秋霜烈日な家訓の教えを忠実に守り、末期症状的な幕府の先鋒に立って、尊攘・倒幕派の浪士たちを厳しく取り締まるが、激動する情勢の中で、徳川の時代は終わりを告げる。そしてついに戊辰戦争が勃発、浪士の弾圧で薩長の恨みを買った容保は謹慎・恭順を認められず、朝敵として追われる立場となった。会津へ戻った容保は、会津藩をあげて新政府軍に徹底抗戦したが（会津戦争）、力及ばずついに降伏、滅藩処分を受けることとなった。

これらは、会津藩の悲劇として非常に有名である。しかし、このあとの会津人たちの行方についてはあまり知られていない。そこで、会津藩という敗者側のその後の歴史をできるだけ明らかにしようというのが本論文の主旨である。

会津戦争敗北後、朝廷から現在の青森県下北半島を中心とした地域に「斗南藩」としてお家再興を許された会津人たちは、斗南藩権大参事・山川浩らを先頭に、原野の開拓、海運、漁業、造林、養蚕などの殖産興業に力を入れるなどして、この北辺の地に新天地を開こうと努力した。が、斗南藩の領有地は凍餒蛮野の超不毛の地であり、会津人たちのここでの生活よりは悲惨極まるものとなった。彼

らは斗南に来て、これはお家再興ではなく、挙藩流罪という史上かつてなき極刑に処せられたのだということを実感した。しかし、そうした窮状にありながらも驚くべきことに、斗南藩は子弟の教育をいささかも怠らなかつた。教育に力を入れるのは会津人たちの旧藩時代からの大きな特徴であり、彼らは教育こそお家隆盛の足掛かりであると信じて疑わなかつたのである。

やがて、明治政府が断行した廃藩置県によって斗南藩はわずか一年数ヶ月にして消滅、会津人たちは「亡国の民」として全国に散らばっていくが、斗南藩で辛酸を舐めた会津人たちの中から実に多彩な人物が輩出していることに気付く。

会津藩には、昔から「ならぬものはならぬ」という言葉がある。

この言葉は江戸時代、日本に約三百あった藩校の中でも内容規模ともにトップといわれた会津藩校日新館での教育によって培われた会津人の気質、つまり会津武士道の精神（会津士魂）を最も簡明かつ深刻に表しているものである。多くの会津人たちは、この「ならぬものはならぬ」に代表される会津士魂と、藩校日新館で育んだ文武両道の才能でもって、見事極貧の境遇から這い上がり、青森で、会津で、そして全国規模で活躍しているのである。最後に、「敗者から生まれる歴史は独創性豊かである」という言葉があるが、多くの会津人たちの生き方を見る限り、もったもな事であるといえるだろう。